

脾は臍臓である。脾は胃と膜を以て相連なる臓器である(素問二十九)。脾臓も脾である。脾は血を蔵して五蔵を温めることを主る(難經四十二)。

経脈は血管と神経の反射現象である。経脈は血液を運行する器官だと記してある。(靈樞四十七)。心経(靈樞七)、衝脈(靈樞三十八)の経路は血管系の主幹の全体像をよく示している。

(一九九五年二月例会)

ロンドン病院博物館報告

山根 信子

正式名称は The Royal London Hospital Museum & Archives Centre である。

ロンドン市の東、地下鉄、ホワイトチャペル駅で下車し地上に出ると、正面に古くて大きな建物があり、それがロンドン病院の本館である。一七四〇年に施療病院として設立された。

この地区は現在もイーストエンドと呼ばれ移民・下級労働者・港湾労働者・貧民達の居住地区でポリスもあまり行きたがらぬ地区と聞く。昼間でも一人で歩くには少々の緊張を伴う。有色多民族労働者の街で英語を解せぬ人々も多いようだ。病院の案内板には英語・アラビア語・中国語等々で掲示され、外来患者も九九%が有色人種のようなのである。

本館と外来棟の間に医学校(二七八五)があり、道一つへだてて向い側が医学校図書館で、その地下室が博物館である。この図書館は一九世紀初頭のイギリス教会スタイルで、内に入ると教会の礼拝堂そのものが図書館になっているデザインで、建物自体も博物館のようである。博物館は一九九〇年九月、病院設立二五〇年を記念して開館された。

一九九一年十月に初めて訪れた時は入館料を払い内に入っても何か雑然とした印象であったが、一九九七年一月の訪問時は、入館料無料で展示も年代を追って美しくわかりやすい展示になっていた。

第一のコーナーは一七四〇年から一八六三年までで一七四〇年当時のこの地区の住民や港湾労働者の様子が良く理解できる展示で、施療病院の存在価値が浮きぼりにされている。この時期、活躍した医師 James Parkinson (1755~1824)、Sir William Blizard (1805~1880) の業績紹介と共に当時使用された医用器械や看護用具、食器類(病院名入)が展示されている。

第二のコーナーは一八六四年から一九一八年までで、私はこのコーナーに最も強くひきつけられた。

一八三〇年~一八六六年頃、この地区では「コレラ」が大流行した。それに対する病院の活動や公衆衛生事業の発展がわかり易く展示されている。フロレンス・ナイチンゲールの活動も大いに影響して彼女の業績も紹介されている。当院の名マトロンである Eva Luckes は一八八〇年から一九一九

年まで在職し看護の改革、質向上に尽力し多くの人々の賞讃をうけた。彼女の写真や記事に強くひかれた。この人は、日本では殆んど知られていない。近年知られるようになった Edith Cavell (1865~1915) は、当院看護学校の卒業生である。彼女に関する貴重な文献を古川明先生からいただいたのが再訪の動機である。前二回の訪問時は、わずかな知識で見たので印象もうすかった。今回はしっかり学んだ。そしてここには特別コレクションのユニフォーム(主としてナース)が等身大の木型に着せられて展示され、人々の目を楽しませてくれる。

ユニフォームも流行がある。一九世紀初頭のものは見事なロングスカートで、ナースキャップも初期のもの程、美し hands のこんだデザインである。洗濯やアイロンがけは誰がしたのかと思った。一九七五年にロンドン・セント・トーマス病院を訪問した時、ナイチンゲールナースの婦長のキャップを手にとって拝見した。極上の生地でブリーツやフリルの見事なもので私は強い羨望をおぼえた。説明では、このキャップ専任のプレスマンがリタイアする時がこのキャップの終りだと。特殊な手仕事なのである。当時、アメリカのナース達はノーチャップになりつつあった。イギリスも現在は殆んどナースがノーキャップである。このキャップはいずれもナイチンゲールナースのキャップ程、複雑なデザインではないがやはり美しいキャップである。前回より数が減しているが、狭いスペースに並びにくいのであろうか。しかし良く工夫さ

れて展示してある。ナース以外のユニフォームも少しあったが職種・時代等不明であった。これからの作業であらうか。

第三コーナーは一九一九年から今日まで。

改革とチャレンジのコーナーである。世界大恐慌の大量失業者の問題、また第二次世界大戦で受けた大被害。対策と再建には並々ならぬ苦勞と努力があったようだ。

他にはメダルやバッヂ、トロフィー等々が展示されている。

最後のコーナーはフィルム・ビデオのコーナーで見学者は自由に見られる。私は最初にヘリコプターによる救急活動のビデオテープを見た。一九九一年製作、カラーで二五分。この日もヘリコプターの発着を何回か目にしたのである。当院はヘリコプター・救急車の他に患者送迎用の自動車も数台持ちフル回転しているようだ。

他には当看護学校の歴史と、現在の看護学校紹介のフィルムを見た。このフィルムはイーデス・キャベルホーム(ナースの宿舎)の紹介もあった。

売店で、資料や絵ハガキ・本を買って外に出ると、冬の午後四時はもう真暗であった。

(一九九五年二月例会)